
シンポジウム

論題 中世における神秘思想

司会 慶應義塾大学 坂口 昂吉

提題：ボナヴェントゥラの神秘思想における
フランススコイズム

南山大学 長倉 久子

提題：「神秘」——ドゥッンス・スコトゥス
の場合

八木 雄二

(於 岡山大学 1995. 11. 12)

司 会

坂 口 昂 吉

中世における神秘思想と題し、特にフランススコ会を中心にしてシンポジウムを開きます。提題者として長倉久子さんにボナヴェントゥラを、八木雄二さんにドゥッンス・スコトゥスを論じて頂きます。

シンポジウムに入るに先立ち、フランススコ会神秘思想の原点となった聖フランシスコについて簡単にお話致します。彼は1181年に生まれ1226年に没したフランススコ会創立者であります。彼は実践家であり、思弁家ではありませんでした。しかし彼の実践は彼独自の神秘思想の表現でありました。その意味で、彼は神秘主義の著述家ではないが、その全生涯そのものが神秘主義に包まれていたといえるでしょう。そしてこの実践に表明された神秘思想は、スコラ学者となった彼の弟子たちの学問の中に定着し、スコラ学フランススコ会学派を生みだしました。アレクサンデル・ハレンシス、ボナヴェントゥラ、マテウス・デ・アクアスパルタ、トマス・デ・エボラコ、ドゥッンス・スコトゥスらがそれであります。

それでは聖フランシスコにおいて行為をもって示され、後の理論家たちにその特色を与えた思想的特色とは何でありましょうか。それには多くの点が指摘されます。

第一は聖書中心主義であります。第二は愛の知性に対する優位、ないし意志の知性に対する優位であります。第三は人間と自然、即ち被造物のすべてが神に依存していることの強調であります。第四は、父と子と聖霊の三位一体に対する畏敬、なかななく御子キリストの重視であります。

以上は一般的に言われるところでありますが、その第四点について多少子細に見てみたいと思います。アンジの聖フランシスコの回心のきっかけになったのは、1206年、それまで甚しく嫌悪していた癩者を介護したことであります。この時、彼は癩者のうちに人間キリストの姿を見たのであります。この事件は、聖フランシスコの『遺言の書』、チェラーノのトマス『第一伝記』などに記されております。この描写を、グレゴリウス・マグヌスの説教などに見られる同種の事件の記述と比較すると、聖フランシスコの癩者に対する態度が、より精神的・象徴的でなく、より肉体的・現実的であり、迫真性をもっていただことがわかります。ここに見られる聖フランシスコの精神は、同じキリスト中心主義といっても、キリストの神性よりも人性に重点を置くものであります。また同じ人間キリストと言っても、その精神のみでなく、肉体にも重きを置くものであります。神の御言葉としての普遍性のみを尊重するのではなく、歴史の中に受肉し具体的個人となられたキリストの個性を重んずる立場でもあります。

さらに聖フランシスコの御托身の重視は、彼の聖体の秘蹟に対する態度に如実に現われています。彼は『訓戒の言葉』の中で、パンとぶどう酒の秘蹟のうちにキリストの御体と御血を見ないものは、罪を犯すのである、とすら述べています。ここに見られる聖フランシスコの神秘主義は、宗教的靈感に溢れるヒューマニズムと言ってよいでありましょう。

この聖フランシスコの精神的特性は、フランシスコ会スコラ学者たちに強烈な影響を及ぼしました。その一例は、ボナヴェントゥラとスコトゥスによる個別化の原理の説明にあります。ボナヴェントゥラによれば、個別化は、数量的には質料から生ずるが、個物に尊厳を賦与する意味では形相から生ずる、といわれます。またスコトゥスは、個別化は単なる形相と質料の合体からではなく、個物性 (haecceitas) という積極的現実化の原理の賦与を要する、と考えます。このように、ボナヴェントゥラとスコトゥスも、表現に微妙な差異はあるものの、抽象的普遍者としての人間ではなく、歴史上の具体的個人としての人間に重きを置いているのであります。これは彼らの共通の始祖聖フランシスコの神秘主義に端を発するものと言おうかと思うのであります。